

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2011年2月16日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 192】

東労組の人事・賃金制度討議資料は社会主義の教科書か？

衆議院予算委員会での審議に関する検証で一旦途切れたが、「No.188」に続き、JR東労組が2009年9月に作成した「考えよう 組合員のための人事・賃金制度」と題する「職場討議資料」の一部を記載した。引き続き、異様な内容を紹介していきたい。

2 私たちは労働者 注) 搾取:資本家が支払った労働力の価値(賃金)以上に労働者によって生産された価値から利潤を取得することです。つまり労働者が労働によって生み出した価値が、労働者の賃金と資本家の儲けとに分けられます。労働者は自分の労働で生み出した価値の大部分を資本家の儲けとして奪い取られているのです。

3 労働組合が闘ってこそ労働者の生活は守られる

労働者が組合に組織化されていない頃、労働者の生活は企業の意のままにされてしまいました。労働者は多くの犠牲をはらう歴史の中で一人ひとりでは弱く、労働組合をつくり団結することの重要性を体得し、今日に至っているのです。しかし全盛期からすると必ずしも労働組合が労働者の期待に答えていないのも現実です。1980年前半から民間先行の労働戦線の統一が始まり、1989年に官民が統一して連合が発足しました。その結果、「大同団結」の裏側で資本と関わらない労働組合化が進み、労働組合は資本の枠組みの中での「闘い」しかできない大きな潮流をつくってしまいました。また1991年社会主義(注)の国と言われたソ連が崩壊し、社会主義より資本主義が優越した社会であるとの考え方が跋扈し、労働組合・活動家の目指すべき拠り所がなくなったことも労働側に大きな影響を与えました。歴代連合会長が「勲章」をもらうことに象徴される様に、関わらない労働組合化が冷徹な資本の論理を許し、首切り、賃下げ、労働者どうしの格差が拡大された労働者の分断を許してしまいました。資本主義に対抗するという考え、思想を労働者が諦めてしまった結果の付けが、今重くのしかかっています。しかし「社会主義」を標榜しようと言っているわけではありません。冷徹な資本・企業に対して怒りを持って、「社会主義」の底流に流れている「平等」という核心点を学んで、絶対的ヒューマンイズムの精神をしっかりと打ち立てて運動をつくっていかうと言っているのです。そして労働組合が組合員のために「闘う」という基本を見失わないということです。注) 社会主義:資本主義の次に訪れる社会体制といわれており、生産手段の社会的所有を土台とする社会体制、及びその実現を目指す思想・運動を言います。社会主義経済は生産手段の社会的所有と生産と分配の計画経済を特徴としています。以前は資本主義に対抗する考え方として多くの共鳴者がいましたが、ソ連の崩壊以降、社会主義国が次々と崩壊し、「過去の遺物」として葬り去られようとしています。しかし社会主義の良いところまで切り捨てる必要はないのではないのでしょうか。こんな格差社会をつくり出してしまうのは止めどもない利潤を追求する資本主義の罪悪であることも確かです。社会権や生存権を確立するためにも、社会主義の良いところは学ぶべきではないのでしょうか。

東労組と革マル派との関係を想起させる異様な「職場討議資料」

これがまともな組合の賃金制度の職場討議資料なのか。社会主義の教科書ではないのか。果たして、まじめに読んで討議する組合員がいるのか。連合発足で「資本と関わらない労働組合化が進み、労働組合は資本の枠組みの中での『闘い』しかできない大きな潮流をつくってしまいました」との主張や、歴代連合会長の叙勲に対する下劣な批判など、実に失礼千万、不遜極まりない。自分たちは「資本と闘う組合だ」と誇っているのだろうが、この資料を読むと、一般人には「JR東労組は革マル派だ」と言っているように映るだろう。